京都大学言語学研究 (*Kyoto University Linguistic Research*) **24** (2005), 131–152

チャック語の資料と文法解釈
—「虎の夢」—*

藤原　敬介

0　はじめに

0.1　本稿の目的と構成

本稿では筆者がこれまでに収集したチャック語資料のうち、「虎の夢」と題する民話について、本文と文法解釈を提示することを目的とする。

0.2 以下では、チャック語についての概況、本稿であつかう資料の記録方法、表記上の注意などについてのべる。**1** では「虎の夢」について、本文を提示する。**2** では「虎の夢」について、文法解釈を提示する。**附録**として「チャック語の連声」をつけた。

0.2　チャック語について

チャック語(Cak)はバングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵(Chittagong Hill Tracts)を中心として、チャック人によってはなされている言語である。BBS(2004: 139)によれば、バングラデシュ国内におけるチャック人の人口は2000人である[注1]。

MATISOFF(1996)によれば、チャック語はチベット・ビルマ語派(Tibeto-Burman)、ジンポー・ヌン語支(Jingpho-Nungish)、ルイ語群(Luish)に属する[注2]。

0.3　資料について

本稿で提示するチャック語の民話「虎の夢」は、筆者が2001年から2004年にかけて数次にわたりバングラデシュに渡航し、首都・ダカでオントワインギョー＝チャックさん(oŋthwáiŋgyo=ca?; 20代・学生)から対面調査をしてあつめた、民話を中心とする五十数編の資料のうちのひとつである。資料収集にあたっては、筆者が考案したラテン文字によるチャック語簡易音声表記をチャックさんにまず学習してもらった。つぎに、その表記にしたがって、チャックさんに民話をかいてきてもらっ

---

* 主要語句: チベット・ビルマ語派、ルイ語群、チャック語、民話、文法解釈。

注1 GORDON(2005)には2002年の数字としてChakの項目が5500人となっている。これはバングラデシュにおける最新の人口調査の数字と推定される。しかし筆者自身はまだ直接確認していない。

注2 ただし、ルイ語群とよばれる言語群の具体的な言語特徴はいまだあきらかではない。

た。最後にその資料を音読してもらい、表記上のまちがいをただしつつ、意味をたずねながら、文法解釈をつけていった。したがって本稿で提示する資料は、自然発話ではない。純粋な意味での「口語資料」というわけでもない。ただし、チャック語がかきことばとして使用されることは一般にはない。チャックさんははなしことばにちかい形式でかいてきたものとおもわれる。

調査の媒介言語は主としてバングラ語(Bangla/Bengali)とマルマ語(Marma)[注3]である。

本稿で本文と文法解釈を提示する「虎の夢」については、すでに藤原(2004a)における附録として発表したことがある。しかし藤原(2004a)では本稿にしめす本文と語釈を提示しただけで、文法解釈はつけなかった。また、本稿と藤原(2004a)とでは、本文における表記や語釈のつけかたが変更されている点もある。特に文法的小辞の語釈がおおきくことなっている場合がある[注4]。

0.4 表記上の注意

本稿におけるチャック語表記は藤原(2002)によるチャック語音韻表記を改変したものである。チャック語の音素は、/p, ph, b, t, th, d, c, ch, j, k, kh, g, ʔ(末子音としてのみ), ɓ, ɗ, v, s, ʃ, h, m, n, ŋ, l, r, w, y; i, e, ai, a, o, u, ɪ, ɯ, ə/である。声調には低調(無標)と高調(有標: ´ でしめす)の二種類がある。ただし ə と声調については、基底形ではなく、チャック語の連声規則に則した、実際の音形にちかい語形をあげている。

変調によって声調がかわる母音を小型大文字で表記したり、有声交替をおこす語について、初頭子音を有声の小型大文字で代表して表記していることがある。たとえば継起をあらわす従属節標識は、先行する音節の音節構造と声調にしたがって -góʔ～-goʔ～-kóʔ～-koʔ という四種類の実現形をもつ。これを本発表では簡略化して、語釈や注釈で GO などと表記している場合がある。

本稿で使用する記号・略号についてくわしくは、本稿末尾の**記号・略号一覧**を参照。

注3 マルマ語はチッタゴン丘陵ではなされる言語である。藪(1993)ではビルマ語アラカン方言の変種ないし下位方言とされている。

注4 これは藤原(2004a)においては、それぞれの小辞がもつ意味に則して語釈をつけていたのに対し、本稿では、意味がはっきりしている場合をのぞいては、それぞれの小辞の代表形式で語釈をつけるようにしているからである。たとえば一般に動作記述をあらわす述部標識である-heʔ～-héʔ に対して、藤原(2004a)では VPRD(verbal predicative)のような語釈をつけていた。しかし本稿では単に HE という語釈をつけている。

1 「虎の夢」本文

記録日 2004 年 3 月 17 日

0. kəsə -gə́ iʔmaŋ
虎 -GEN 夢
虎の夢

1. áyaŋ =háiʔ -kə́ -raiʔ, práiŋ =práiŋ -nə ŋə =laŋ -heʔ -láiʔ.
前 =季節 -GEN -時 国 =CL -一 存 =(過去) -HE -HS
昔々、ある国があったそうです

2. iŋmə́ práiŋ -ná -∅, məlíŋ =hraŋ -nə ŋə =laŋ -heʔ -láiʔ.
それ 国 -そば -LOC 森 =CL -一 存 =(過去) -HE -HS
その国のそばに森がひとつあったそうです

3. iŋmə́ məlíŋ -yə -gá apháŋ =pháŋ -na -∅ vaʔ =ta -rə túŋ =laŋ -heʔ
その 森 -LOC -GEN 木 =CL -一 -LOC 豚 =CL-一 住 =(過去) -HE
-láiʔ.
-HS
その森のある木に豚が一匹すんでいたそうです

4. apháŋ =aphúŋ -ŋa huŋbúʔ =ma -ra átho átaʔ -kóʔ, túŋ =laŋ -heʔ.
木 =上 -LOC フクロウ =CL -一 巣 つくる -GO 住 =(過去) -HE
木の上にフクロウが一羽巣をつくってすんでいました

5. áyoʔka ácɯsa -∅ kəsə -yɯʔ =ta -rə túŋ =laŋ -heʔ.
さらに 近 -LOC 虎 -も =CL -一 住 =(過去) -HE
さらに近くには虎も一匹いました

6. mə́ kəsə -gəlú vaʔ -aŋ ɓo -góʔ, khyúkhyúɪ ɓo -gə -héʔ -laiʔ.
この 虎 -DEF 豚 -OBJ 見 -GO ONOM 見 -GA -HE -HS
この虎は豚をみて、とてもたべてみたくなったのだそうです

7. kəsə -gəlú "ásəmí rɪ -néʔ, sə =lu -gə -yáʔ" cáiŋjá -goʔ, á-
虎 -DEF どのように COP -COND 食 =(可能) -GA -Q 考 -GO NEG-

lu -náiŋ -lái?.
得 -NAIN -HS
虎は「どのようにしたらたべられるのか」と考えて、得られなかったそうです

8. ya? -tə -gə́ -rai?, cáiŋjá -go?, i? -kə́laŋ -he? -ká, i?maŋ -ŋə va? -ká
CL -一 -GEN -時 考 -GO 眠 -KALAN -HE -CONJ 夢 -LOC 豚 -GEN
ásaiŋ -yaŋ sa -gó?, ɓo -gə -hé? -lai?.
肉 -OBJ 食 -GO 見 -GA -HE -HS
ある日、考えて眠ってしまってから、夢で豚の肉をたべるのをみたのだそうです

9. kəsə -gəlú va? -thə́ne? laŋ -gó?, ŋə́ -gə -hé? -lai?.
虎 -DEF 豚 -ところ 行 -GO 言 -GA -HE -HS
虎は豚のところに行っていったのだそうです

10. "ŋə na?təkrái? na?tai? naŋ -ŋaŋ sa -gó?, i?maŋ -ŋə ɓo -wə -he?."
1 昨日 夜 2 -OBJ 食 -GO 夢 -LOC 見 -XA -HE
「わたしは昨日の夜、あなたをたべる夢をみました」

11. "nígə́ná -a, ŋa átai? naŋ -ŋaŋ sə -ái? -he?."
そのため -LOC 1 今 2 -OBJ 食 -(当為) -HE
「だからわたしは今あなたをたべるのがふさわしい」

12. va? -kə́lú ŋə́ -gə -hé?.
豚 -DEF 言 -GA -HE
豚はいったのです

13. "mə́ -de ha? -tə -yɯ? á- sə =lu -ɓɯ?."
これ -ように CL -一 -も NEG- 食 =(可能) -BU
「そのようにたべることなど絶対にできません」

14. "ŋə maŋ -thə́ne? tərа =átaiŋ -ya -gá."
1 王 -ところ 裁判 =反対する -XA -FUT
「わたしは王のところで裁判をしに行きます」

15. átai?-ká -de ŋá -go?, va? -kə́lú maŋ -thə́ne? ʃó? -a -gə -hé? -lai?.
今 -GEN -ように 言 -GO 豚 -DEF 王 -ところ 訴 -XA -GA -HE -HS

このようにいって、豚は王のところに文句をいいに行ったのだそうです

16. kəsə -yɯʔ vaʔ -ká álo -wa álo -wa laŋ -gə -héʔ -laiʔ.
虎 -も 豚 -GEN 後 -LOC 後 -LOC 行 -GA -HE -HS
虎も豚の後についていったのだそうです

17. maŋ -gəlú mə́ tú -waŋ táiʔ -koʔ, ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
王 -DEF これ はなし -OBJ 聞 -GO 言 -GA -HE -HS
王はこの話をきいていったのだそうです

18. " 'iʔmaŋ -ŋə sa -góʔ, ɓo -heʔ' -me ŋə́ -neʔ, sə =lu -gá."
夢 -LOC 食 -GO 見 -HE -EMPH 言 -COND 食 =(可能) -FUT
「『夢でたべてみた』とさえいうなら、たべられる」

19. maŋ vaʔ -aŋ ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
王 豚 -OBJ 言 -GA -HE -HS
王は豚にいったのだそうです

20. "yaʔ -páŋmə́íŋ khənáiʔ -yaʔ -bade tərə phraiʔ -ká."
今日 -から 七 -CL -あとに 裁判 成 -FUT
「今日から七日あとに裁判になる」

21. "naŋ naŋ -gə́ *ukil* -aŋ o -la -kə́aiŋ."
2 2 -GEN 弁護士 -OBJ 呼 -LA -KAAIN
「お前はお前の弁護士をよびに行きなさい」

22. átaiʔ -kə́ -de ŋá -goʔ, maŋ -gəlú ámə -raʔ -aŋ phroʔ -naʔ -aiŋ -gə
今 -GEN -ように 言 -GO 王 -DEF 3 PL -OBJ 放 -NA -XAIN -GA
-héʔ -laiʔ.
-HE -HS
このように言って、王は彼らをはなしたのだそうです

23. kəsə -gəlú -gɯʔ pyo -góʔ -heʔ -láiʔ.
虎 -DEF -TOP 喜 -GO -HE -HS
虎は喜んだそうです

24. "khənáiʔ -yaʔ -bade vaʔ -ká ásaiŋ -yaŋ sə =ɓo -gə -héʔ", ŋá -goʔ.
七 -CL -あとに 豚 -GEN 肉 -OBJ 食 =(蓋然) -GA -HE (引用) -GO
「七日あとに豚の肉をたべられるのだ」、と

25. níyə vaʔ -kɯʔ sa -góʔ, u -góʔ, á- saŋ -náiŋ -láiʔ.
一方 豚 -TOP 食 -GO 飲 -GO NEG- 入 -NAIN -HS
一方、豚はたべることも飲むこともできなかったそうです

26. má akróŋ -ŋaŋ huŋbúʔ -cíʔ hráiŋ -goʔ, sənáiʔ -naʔ -kə -héʔ -laiʔ.
これ 理由 -OBJ フクロウ -ために 知らせる -GO 見せる -NA -GA -HE -HS
このことについてフクロウに知らせて見せたのだそうです

27. huŋbúʔ mə́ tú -waŋ táiʔ -koʔ, ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
フクロウ これ はなし -OBJ 聞 -GO 言 -GA -HE -HS
フクロウはこの話をきいていったのだそうです

28. "naŋ a- pədáŋ -ŋéʔ."
2 NEG- 心配 -NIMP
「お前は心配するな」

29. "púʔ súŋ -láʔ sa -góʔ, iʔ =túŋ -ŋáŋ."
ご飯 三 -CL 食 -GO 眠 =(継続) -IMP
「ご飯を三回たべて眠っていなさい」

30. "áʃiŋ hraiʔ -néʔ, ŋa -ŋ ŋáiŋ."
時間 落 -COND 1 -OBJ 言.XAIN
「時間になったら、わたしに言いにきなさい」

31. átaiʔ -ká -de rɪ -góʔ, khənáiʔ -ráʔ phraiʔ -heʔ -ká, maŋ -gə́ kíŋ
今 -GEN -ように COP -GO 七 -CL 成 -HE -CONJ 王 -GEN 家
-yə təɾə =caiʔ -ká hraiʔ -kə -héʔ -laiʔ.
-LOC 裁判 =? -GA 落 -GA -HE -HS
このようにして七日たってから、王の家で裁判をすることになったのだそうです

32. maŋ -gá ásəiʔ =hú -wə ŋə =laŋ -heʔ -láiʔ.
王 -GEN 娘 =CL -一 存 =(過去) -HE -HS
王の娘が一人いたそうです

33. árɪʔ =kənáŋhəhvú ŋə =laŋ -heʔ -láiʔ.
姿 =美 存 =(過去) -HE -HS
美しい姿だったそうです

34. neʔ, tərə phraiʔ -heʔ -ká, maŋ -gəlú ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
さて 裁判 成 -HE -CONJ 王 -DEF 言 -GA -HE -HS
さて、裁判になってから、王はいったのだそうです

35. "iʔmaŋ -ŋə ɓo -néʔ, sə =lu -heʔ", ŋá -goʔ.
夢 -LOC 見 -COND 食 =(可能) -HE (引用) -GO
「夢に見るのなら、たべられる」、と

36. mə́ -gə́ -raiʔ, huŋbúʔ -kə́lú maŋ -gə́ kíŋ =məraŋ -ŋa -bəíŋ kəɗiŋ
これ -GEN -時 フクロウ -DEF 王 -GEN 家 =屋根 -LOC -から 落
-kə́aiŋ -gə -héʔ -laiʔ.
-KAAIN -GA -HE -HS
このときフクロウは王の家の天井からおちてきたのだそうです

37. cúʔmə́ ríʔ -koʔ, ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
突然 起きる -GO 言 -GA -HE -HS
突然おきあがっていったのだそうです

38. "ŋə yaʔ iʔmaŋ -ŋa maŋ -gá ásəiʔ -íŋ móŋnáŋ phraiʔ -kóʔ, maŋ -ŋə
1 今日 夢 -LOC 王 -GEN 娘 -COM 夫婦 成 -GO 夢見 -XA
-heʔ."
-HE
「わたしは今日夢で王の娘と夫婦になるのを夢見ました」

39. "nígə́ná -a ŋə maŋ -gá ásəiʔ -aŋ lu -áiʔ -heʔ."
そのため -LOC 1 王 -GEN 娘 -OBJ 得 -(当為) -HE
「だからわたしは王の娘をえるのがふさわしい」

40. maŋ -gəlú ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
王 -DEF 言 -GA -HE -HS
王はいったのだそうです

41. " 'iʔmaŋ -ŋə ɓo -heʔ' ŋá -gə́ -yɯʔ, ŋə -gá ásəiʔ -aŋ á- lu -ɓɯʔ -ká."
夢 -LOC 見 -HE 言 -GA -も 1 -GEN 娘 -OBJ NEG- 得 -BU -FUT
「『夢に見た』といっても、わたしの娘をえることはできない」

42. huŋbúʔ mə́ -gə́ -raiʔ ŋə́ -gə -héʔ -laiʔ.
フクロウ これ -GEN -時 言 -GA -HE -HS
フクロウはこのときいったのだそうです

43. “kəsə -yɯʔ ‘iʔmaŋ -ŋə ɓo -heʔ’ ŋá -gə́ -yɯʔ, vaʔ -aŋ á- sə =lu
虎 -も 夢 -LOC 見 -HE 言 -GA -も 豚 -OBJ NEG- 食 =(可能)
-ɓɯʔ -ká.”
-BU -FUT
「虎も『夢に見た』といっても、豚をたべることはできない」

44. neʔ, təra á- phraiʔ -naʔ -náiŋ -láiʔ.
すると 裁判 NEG- 成 -NA -NAIN -HS
すると、裁判にはならなかったそうです

45. vaʔ rwáiʔ -kə́laŋ -gə -héʔ -laiʔ.
豚 自由 -KALAN -GA -HE -HS
豚は自由になったのだそうです

46. taiŋdu suŋ -kə́aiŋ -náiŋ.
お話 終 -KAAIN -NAIN
お話はおわりました

2 「虎の夢」注釈

本節では、前節で本文をしめした「虎の夢」に対して、文法解釈を中心とした注釈をつける。

全般的な注意点を以下にしるす。

- 以下にしめす番号は、本文につけた行番号と対応している。
- 特に注釈を必要としないと判断した行については、注釈をつけていない。
- ビルマ文語(WrB)の形式は大野(2000)の語形をラテン文字表記したものである。
- マルマ語の形式は筆者による一次資料で、表記は藤原(2003)による。
- ジンポー語の形式は徐他編(1983)による。
- PTB の形式は MATISOFF(2003)による。

0. チャック語の民話には一般に題名がない。「虎の夢」はチャックさんが内容から判断してつけた題名である。

kəsə 「虎」の本来の語形は kəsa である。しかし後続する GA とまとめて発音されるために、語末の a が弱化して ə となっている。このような例は本文中、ほかにも多数みとめられる。

属格後置詞 -gə́ は、附録にあげた「有声交替」をしめす語である。母音については、すでにあげた kəsə と同様に弱化する傾向にあるので、本来的には á であることがわかる。しかし初頭子音については、環境によって g と k が相補分布しているために、どちらか一方を基底形とさだめることができない。本稿では便宜的に GA と表記することで代表形としている。属格後置詞 -gə́ は多義的でもある。同音異義語として、名詞節をつくる小辞である GA、未来をあらわす述部標識である GA、目的をあらわす小辞 GA などがある。これらの GA がひとつのおなじ小辞から派生していろいろな意味をあらわすようになったのか、もともとちがう小辞がみかけ上おなじ形式となったのかについては、どちらかときめられるだけの根拠はない。一方で、これらの GA のおおくは日本語でならばいずれも「の」と訳すことができる。このことは、GA でしめされる小辞が共通する意味的特徴をもっていることをしめしているようにおもわれる。ただし本稿では、それぞれの場合によって機能を明示して語釈をつけている。

1. áyaŋ=hái?-kə́-rai? は分析的には「前=季節-GEN-時」のように解釈することができる。しかし、全体で「昔々」という意味のきまり文句である。-rai? に対して「-時」という語釈をあたえているのは、全体の意味から判断してのことである。-rai? だけをとりだして、対応する訳語があたえられるわけではない(以下、#8、#36、#42 に類例あり)。

   práiŋ(CL)は「国」をかぞえるのにつかわれる類別詞である。-nə は意味的には「一」をあらわし、直前に -ŋ がある場合にあらわれる(以下、#2、#3 に類例あり)。práiŋ=práiŋ-nə 全体で「ある国」の意味をあらわす。

   =laŋ は「いく」をあらわす動詞に由来する。しかし現在では文法化して、過去をあらわす助動詞としてつかわれることもおおい(以下、#2、#3、#4、#5、#32、#33 に類例あり)。助動詞は拘束形態素と解釈されるから '=' ではなくて '-' をもちいるのが適当かもしれない。'=' をもちいているのは、laŋ を単独でもちいれば「いく」の意味をあらわすことからもわかるように、語としての自立性がたかいからである。

   -he? は動作をあらわすもっとも代表的な述部標識である。-he? の基本的な用法については藤原(2004b)を参照。

   -lái? は伝聞をあらわす文小辞である。HE が直前に先行する場合のみ、HE の声調がたかければひくく、ひくければたかくあらわれる傾向がある。

2. 場所格をあらわす後置詞 -XA が実際にあるのかどうかは、一見わかりにくい。この文では、語末の母音 a が弱化して ə であらわれることが予想される

環境であるにもかかわらず、弱化していない。だから、a であらわれる語が後続していて、その a と語末の a が融合している可能性がある。チャック語において a 単独であらわれる語は、場所格後置詞の -XA のみである。場所格後置詞 -XA は先行する母音 a と融合して、形式的には -∅ で実現していると解釈している(以下、#3、#5 に類例あり)。

hraŋ(CL)は森や川といった「自然」をかぞえるのにつかわれる類別詞である。

3. -gá apháŋ(-GA 木)のように、語末の a と 語頭の a が連続する環境においては、語末の a が弱化して ə となることはない(附録の「チャック語の連声」でものべるように、#4、#5、#8、#14、#16、#24、#26、#32、#38、#39、#41、#44 に類例あり)。

pháŋ(CL)は「木」をかぞえる類別詞である。

ta(CL)は「動物」をかぞえる類別詞である。-rə は意味的には「一」をあらわし、直前に母音 -a がある場合にあらわれる(以下、#4、#5 に類例あり)。

4. =aphúŋ(=上)は場所的な関係をあらわす名詞である。さらに場所格後置詞 -ŋa をとって、全体で後置詞のようにふるまっている。

ma(CL)は「鳥、魚、虫」などをかぞえる類別詞である。

-kóʔ(GO)は動作の継起をあらわす従属節標識である。直前の音節の声調がたかければひくく、ひくければたかくあらわれる(以下、#6、#7、#8、#9、#10、#15、#17、#18、#22、#23、#24、#25、#26、#27、#29、#31、#35、#37、#38 に類例あり)。

5. -yɯʔ が kəsə「虎」と =ta-rə「一匹」のあいだにはいっているところからわかるように、kəsə と =ta-rə のむすびつきはそれほどつよくはない。

6. -gəlú は後置冠詞のような役割をはたし、既知の要素で文の主語となるものを表示する機能をはたす傾向がつよい。この語形は、もともとは属格をあらわす GA と、「人間」をあらわす lú が融合したものとおもわれる(以下、#7、#9、#12、#15、#17、#22、#23、#34、#36、#40 に類例あり)。ただし、属格の GA に由来するならば声調はたかくあらわれることが予想されるにもかかわらず、声調がひくい音節に後続する場合には、ひくくあらわれる。声調がたかい音節に後続する場合には、#36 にあるように、たかくあらわれる。

khyúkhyúɪ はとても食べたくなる様子をあらわす擬態語である。

ɓo-gə-héʔ のように「動詞-GA-HE」となる述部の意味については、よくわかっていない。本稿では GA の部分を「の」と訳し、全体としては「動詞-のだ/のです/のである」などと訳すことにしている(以下、#8、#9、#12、#15、

#16、#17、#19、#22、#24、#26、#27、#31、#34、#36、#37、#40、#42、#45 においても同様に訳している)。「GA-HE」の形式は、「のだ」と訳すと日本語とよく対応しているようにみえるというだけでなく、「のだ」と同様に、従属節では原則としてはあらわれないという特徴をもつ。ここの ɓo「みる」は「～してみたくなる」という意味をもっている。また、述部標識 HE は、直前に GA がくる場合にかぎり、たかい声調であらわれる。ただし、たかいといっても、GA と比較して相対的にたかいという程度である。自由変異であるのかもしれない。本稿では、音声的にややたかくあらわれることがおおいという事実を重視して、音韻論的にも高声調で表記している。

7. ásəmí は、分析的には ása「なに」と mí「よい」からなる。ásəmí 全体では「どのように」という意味になっている。

ɪɪ はバングラ語できくと *kɔra*「する」と訳され、日本語でも「する」と訳すことができる動詞である。しかし、統語的には繋辞の機能をはたしている(以下、#31 に類例あり)。

-né? は条件をあらわす従属節標識である。直前の音節の声調がたかければひくく、ひくければたかくあらわれる傾向にある(以下、#18、#30、#35 に類例あり)。

=lu(可能)は、能力的な可能をあらわす(以下、#13、#18、#35、#43 に類例あり)。#24 でしめす=ɓo(蓋然)があらわす状況の可能とはことなる。lu は動詞としては「獲得する/得る」という意味をあらわす。

-yá は補足疑問文をあらわす文小辞である。

cáiŋjá-go? にあらわれるように、継起をあらわす GO の直前では、母音 -a が弱化して -ə となることはない(以下、#8、#10、#15、#18、#22、#25、#29 に類例あり)。

チャック語の否定文は一般に「否定辞(A-)-動詞-否定述部標識」の形式をとる(以下、#13、#25、#28、#41、#43、#44 に類例あり)。-náiŋ は肯定文でも否定文でもあらわれる動詞述部標識で、動作の完了をあらわす(以下、#44、#46 に類例あり)。否定辞 A- は後続する音節の声調がたかければひくく、ひくければたかくあらわれる傾向にある。

8. ya?(CL)は「日」をかぞえる類別詞である。類別詞は通常はかぞえる対象の名詞をともなってあらわれる。しかし ya?-ta「ある日」のように、名詞をともなわずにあらわれて、副詞的にはたらくものもある。-tə は意味的には「一」をあらわし、直前に ? がある場合にあらわれる(以下、#13 に類例あり)。

-kə́laŋ は動作の完了をあらわす助動詞である。分析的には、完了をあらわ

すと推定される接頭辞 kə́- に、「いく」を意味する動詞 laŋ が後続した形式である(以下、#45 に類例あり)。

-ká(-CONJ)は HE のあとにしかあらわれない。この形態素については母音 a が弱化することがないところから、#2 と同様に、分析的には GA-∅(-LOC)とかんがえたほうがよいかもしれない(以下、#31、#34 に類例あり)。

ɓo は単独では「見る」という意味である。しかしここでは「(〜して)みる」という意味である(#6 とはことなることに注意)。

9. -thóne? は先行する音節の声調がたかければ -thəne? で、ひくければ -thóne? であらわれる。

10. na?təkrái?「昨日」は na?tai?「夜」-GA「の」-rai?「時」と分析できるかもしれない。そのように分析するならば、-tai? の部分が -tə と弱化し、声門閉鎖音があった残滓として GA は k であらわれ、母音は脱落していると解釈することになる。しかし、このような変化をおこす例は、ほかに確認されていない。だから、#1 でのべた ya?-tə-ká-rai?「ある日」のように、分析的に解釈することはむずかしい。なお -krái? の部分は sá?krái?「暦」(< Marma θa?krɔi?)という場合の -krái? とおなじように発音される。本来は -kərái? と発音されるべきなのかもしれないけれども、ə が無声化した結果、音声的には脱落しているようにきこえている可能性がある。本稿では -kərái? のように解釈することはせず、音声を重視して-krái? と表記しておく。

-wə(-XA)は動作の方向性をあらわす助動詞のひとつである。形式的には場所格をあらわす -XA(-LOC)とおなじであり、意味としても場所の移動にかかわる動作の方向性をあらわしていると筆者は解釈している。この文においても直前に -ŋə(-LOC)があらわれていることが、この助動詞の生起と関係していると筆者はかんがえている(以下、#14、#15、#38 に類例あり)。動作の方向性をあらわす助動詞と格標示の関係については藤原(2004a)を参照。

11. nígə́ná-a は全体で「それゆえに/だから」という意味である。ここで問題となるのは、場所格後置詞と解釈している -a である。この形態素は、母音 a が直前に先行する場合、その母音と融合して、形式的には -∅ であらわれると解釈される。-a であらわれるのは、直前に声門閉鎖音 ? がある場合である。しかし、ここでは声門閉鎖音はない。これは、現在のところ、nígə́ná-a の場合にしか観察されていない例外的なふるまいである(以下、#39 に類例あり)。

-ái? はマルマ語 -ai?(WrB ap)からの借用語で「〜すべきである」という意味をあらわす助動詞である(以下、#39 に類例あり)。これを借用語とする根拠は、WrB の -ap は、たとえば「扇」: Cak ya?; Marma yai?; WrB yap のよう

に、チャック語では -aʔ で対応するのが通則であるからである。

13. haʔ(CL)は動作の回数をかぞえる類別詞である。「haʔ-tə-yɯʔ 否定辞-動詞(V)」で、「一度も V しない/決して V しない」を意味するきまり文句となる。

14. tərа=átaiŋ は分析的には「裁き=批判する」となる。しかし、全体で「裁判する/うったえる」という意味のきまり文句である。

-ya(-XA)は #10 であげた場所の移動にかんする方向性をあらわす助動詞である。

-gá は意味的には未来をあらわす述部標識である。しかし形式的には、先行する動詞句を名詞化していると解釈できる。

15. átaiʔ「今」は、名詞節化小辞でもあり属格後置詞でもある GA を介して、小辞 -de につながっているところから、語類としては動詞とおなじふるまいをしていると解釈できる(以下、#22、#31 に類例あり)。

-a(-XA)は #10、#14 であげた場所の移動にかんする方向性をあらわす助動詞である。

20. -páŋmóíŋ は -páŋmá「-から」と -íŋ「-COM(奪格の機能もはたす)」からなる。全体で「〜から」という意味である。

khənáiʔ「七」-yaʔ(CL)にみられるように、二以上の数詞が類別詞と共起する場合の語順は「数字-類別詞」の順番である。ただし、マルマ語からの借用形式の数詞をつかう場合には、すべての数詞に対して「数字-類別詞」の語順である。

-bade は、「〜のあとで」という意味をあらわす後置詞である(以下、#24 に類例あり)。この語は単独ではつかわれないという意味では小辞的である。しかし、声門閉鎖音のあとで有声閉鎖音がでているので、先行する語とは単一音韻語を形成しない。そういう意味では接語的である。本稿では、単独ではつかわれないという事実を重視して、小辞とみなす。なお、-bade はバングラ語では「〜以外に/〜をのぞいて」という意味をあらわす副詞である。チャック語の形式は、このバングラ語を借用している。そのために、声門閉鎖音のあとでも有声音のままあらわれていると解釈できる。

21. *ukil* はバングラ語からの借用語である。

-la は動詞としては「とる」という意味をあらわす。しかし、ここでは意味的に「とる」とはかんがえにくい。-la には助動詞としてもちいられて場所の移動をあらわす用法もあるので、助動詞と解釈する。助動詞としての -la は、語源的には PTB *la 'come' に対応する。

-kə́aiŋ は動作の完了をあらわすと推定される接頭辞 kə- と、はなしてにむかってくる方向性をあらわす助動詞 -XAIN の融合した形式である。先行する音節の声調がたかければ -kəaiŋ、ひくければ -kə́aiŋ であらわれる(以下、#36、#46 に類例あり)。

22. -naʔ(NA)は動作の完遂をあらわす助動詞である。naʔ 単独で動詞としてつかわれると、「殴る」という意味であるという。しかし、そのような実例は確認されていない。本稿では、実例をみるかぎりでは単独で使用されることがないという事実を重視して、naʔ は小辞であるとかんがえる(以下、#26、#44 に類例あり)。

-aiŋ(-XAIN)は、基本的には、はなしてにむかってくる方向をあらわす助動詞である。しかし、対象にとっての利害も含意する。ここでは「放す」という動作の対象である「彼ら(「豚」と「虎」)」にとっての利害をあらわす(以下、#30 に類例あり)。

23. -gɯʔ(-TOP)は「とりたて」をあらわす(以下、#25 に類例あり)。『虎の夢』では主語名詞句についた例しかあがっていないけれども、ほかの資料では目的格後置詞や場所格後置詞などについた例もみられる。

pyo-góʔ-heʔ のように「動詞-GO-HE」となる形式は例外的である。なぜならば、GO は従属節標識であって、直接に述部標識につながることは原則としてはないからである。しかし、感情をあらわす動詞のように、動詞のあらわす動作の主体の意志性がかんじられない場合には、「動詞-GO-HE」という形式がほかの資料でも散見される。

24. =ɓo(蓋然)は、ここでは、状況の可能をあらわす助動詞である。しかし文脈によっては、義務をあらわす助動詞にもなりうる。ɓo は動詞としては「見る」という意味である。

「動詞-GA-HE」は過去の出来事をあらわすことがおおい。しかし、一人称が主語である場合には、未来のことをあらわすこともできる。

ŋá-goʔ は引用をあらわすのにもちいられるもっとも典型的な形式である。場合によっては「言う」をあらわす ŋá だけで引用をあらわすこともできる(以下、#35 に類例あり)。

25. níyə「一方」は、分析的には ní-yə(-LOC)と解釈できる。しかしチャック語において ní は、単独では「いまだに」という意味をあらわす助動詞である。ただし、ここであらわれている ní は、もしかするとジンポー語の ni[31]「近い」につうじる形式なのかもしれない。

26. akróŋ は文字どおりには「理由」という意味である。しかし、しばしば「〜

にかんして」という意味をあらわす。

-cíʔ「～ために」は与格の機能をはたす後置詞である。

28. 否定辞 A- に後続する音節が ə をふくむ弱化音節であって、それに後続する音節の声調がたかいので、否定辞は a- のようにひくくあらわれている。

pədáŋ「心配する」は、táŋ「様態がわるくなる」に他動詞化接頭辞 pə- がついた形式であると推定される。

-ŋéʔ(NIMP)は否定命令文であることをしめす述部標識である。

29. láʔ(CL)は、Marma əlaʔ「腕」と関係のある形式である。本来は、手でにぎれるものをかぞえるのにつかわれる類別詞である。しかしここでは食事をたべる回数をかぞえるためにつかわれている。

=túŋ(継続)は、動詞としては「住む/居る」をあらわす。しかし助動詞としては動作の継続をあらわす。

-ŋáŋ(-XAN)は命令をあらわす述部標識としてもっとも一般的なものである。

30. ŋáiŋ(言.XAIN)は ŋá「言う」と助動詞 -XAIN が融合した形式である。しかし、どこで分節したらよいのかきめられないので、融合したままの形式で表記している。もしも分節して表記するとしたら、ŋ-áiŋ、ŋá-iŋ、ŋái-ŋ の可能性がかんがえられる。しかし、ŋ-áiŋ と分節するならば、類例についてすべて C-aiŋ と分節しなければならなくなる。これは一見してわかりにくい。C の位置には、ʔ をのぞくすべての音素がたちうるからである。ŋá-iŋ と分節するのは、助動詞が -XAIN であるということをわかりにくくする。ŋái-ŋ と分節するのは、語末の -ŋ が目的格後置詞の -XAN とまぎらわしいだけでなく、チャック語の音節構造としてありえない Cai.C をみとめることになるので、適当ではない。以上の理由により、一般に Ca と -XAIN が融合している場合には、あえて形態素境界をしめしていない。

一方、ŋa-ŋ「わたし-OBJ」も本来は ŋa「わたし」と目的格後置詞の -XAN が融合した形式である。だから、どこで分節したらよいのかきめられないという点ではおなじである。しかし、-ŋ と分節しうる形式は -XAN 以外には存在しないので、便宜的に ŋa-ŋ と表記してもわかりにくさは生じないと判断している。

31. rɪ は繋辞であるから、直訳すれば「このようにあってから」となる。しかし日本語としては「する」と訳したほうがわかりやすいのは #7 と同様である。

ráʔ(CL)はマルマ語からの借用形式で、「日」をかぞえる類別詞である。

tərə=caiʔ は Marma tərá=cɔiʔ「裁判する」から借用した形式である。マル

マ語においては cɔi? 単独でも「審判する/分析する」という意味がある。しかしチャック語においては、cai? 単独では「おしつける」という意味しか確認されていない。それにもかかわらず =cai? として語境界をしめすのは、否定した場合に təra á-cai?-ɓɯ?「裁判-NEG-cai?-BU」というように、təra と cai? の間に否定辞がはいるからである。

32. この文は「王には娘が一人いたそうです」というように、属格後置詞 -gá を所有表現の標識として訳すこともできる。

hú(CL)は「人間」をかぞえる類別詞である。-wə は意味的には「一」をあらわし、直前に-u がある場合にあらわれる。

33. kənáŋhəhvú「美しい」は問題のある語形である。まず「美しい」という意味をあらわす動詞に kənáŋ という形式がある。そこから派生した名詞形式に kənáŋhvú という形式がある。さらにその名詞形式における -hvú の部分が重複して、主として名詞を修飾する形容詞的なものとして使用されるのが kənáŋhəhvú という形式である。ここで -hvú と表記している部分に問題がある。藤原(2002: 229)では fvu と hvu のふたつの音素列をみとめていた。しかし、のちの観察から、hvu のみをみとめるべきであるとかんがえるにいたった。この音素列に対しては [h͡vu] という音声表記をあたえていた。そのように表記する根拠は、hvu の連続に目的格後置詞 -XAN などが後続する場合、わたり音として w があらわれることによる。しかし音声的にはむしろ [hɣ] としたほうがよく、音素としても /ɣ/ をみとめるべきかもしれない。なぜならば、ここで問題としている kənáŋhəhvú という語形において、後半部分の -həhvú という形式は -hvú の初頭子音が重複して -həhvú となっていると推定される形式であるからである。もしも hv- が初頭子音であるならば、*-hvəhvú という重複形式がでなければならない。しかし -həhvú という形式があらわれているということは、-hvú という形式において、初頭子音となるのは h- の部分だけであって、-vú の部分は母音とあつかわなければならないということである。Cv- という音素列に後続しうる母音は -u だけなので、Cvu という音素列をかんがえるよりは、Cɣ という音素列をかんがえたほうが、簡潔である。このことは藤原(2002: 229)において krv- の三子音連続をもつ語と解釈されていた krvú「水浴びする」が kr- の子音連続をもつ krɣ と再解釈されるという利点をもつ。しかし一方で、音素としてあらたに /ɣ/ をみとめなくても、音素 /ɣ/ に相当するものとして /vu/ をみとめておけば、それで処理することができるのも事実である。そこで本稿では、さしあたり /vu/ の表記をひきつづき使用する。しかし /vu/ は将来的に /ɣ/ と再解釈され

る可能性があることは、指摘しておく。

34. ne?「さて」は条件をあらわす従属節標識 -ne? とおなじ語形である。場面の転換をしめす場合につかわれることがおおい。

36. #6 でのべたように、たかい声調の音節に後続するところでは -kɔ́lú のようにたかい声調の形式があらわれる。

-ŋa-bəíŋ(-LOC-から)のように、場所格後置詞のあとに後続する後置詞も存在する。

38. -ŋə(-XA)は動作の方向性をあらわしているというよりは、動作の完了をあらわしている。このように、動作の方向性をあらわす助動詞は、さらに意味が変化して、動作の方向性とはかかわりなく、動作の完了性をあらわすことがある。ただしこの文においては、最初に i?maŋ-ŋa(LOC)というように場所格後置詞がでているので、それに呼応して -XA がでている可能性もある。

41. ŋá-gɔ́-yɯ? で「〜といえども」という譲歩をあらわすきまり文句である。

45. -kɔ́laŋ(-KALAN)は、動作の完了性をあらわすと推定される接頭辞 kə- と過去をあらわす助動詞 =laŋ の融合した形式であると分析できる。

附録・チャック語の連声

有声音と無声音(有声交替)

チャック語では、閉鎖音と破擦音においては絶対語頭以外の位置において有声音と無声音の対立がなくなる傾向にある。すなわち CV および CVŋ に後続する場合は有声音が、CV? に後続する場合は無声音があらわれる傾向にある。

(1) a. C[+voiced] / (C)V(ŋ) __
b. C[−voiced] / (C)V? __

例は本文中に多数あがっているので省略する。

母音の弱化

母音 /-a/ [ɐ] でおわる語が文中にあらわれる場合、その母音が /-ə/ [ə] に変化する傾向にある。

例は本文中に多数あがっているので省略する。

母音の弱化の例外

母音 [ɐ] でおわる語が文中にあらわれる場合、その母音が弱化して [ə] になる傾向にあるとのべた。しかし、後続する語が A- ではじまる場合には弱化しな

い。本文では #3、#4、#5、#8、#14、#16、#24、#26、#32、#38、#39、#41、#44 に該当例がみられる。

逆に、本来なら弱化することが予想される環境にもかかわらず弱化していない場合には、拘束形態素 A- がある証拠ともなる。本文では #2、#3、#5 に該当例がみられる。

母音の弱化の例外としては、拘束形態素 -GOʔ に前接する場合もあげられる。この環境においても母音の弱化がおこることはない。本文では #7、#8、#10、#15、#18、#22、#25、#29 に該当例がみられる。

形態音韻論的交替

藤原(2002: 249–250)で「わたり音」として記述していたものは、以下にあげるような形態音韻論的変化をしているものの一部であることがのちにわかった。

たとえば目的格後置詞をあらわす形態素は(2)にしめすような形態音韻論的交替をしめす。

(2) a. i, e, iŋ, aiŋ のあと: -yaŋ
b. u, o のあと: -waŋ
c. ŋ のあと(ただし iŋ, aiŋ はのぞく): -ŋaŋ
d. ɪ, ɯ, ʔ のあと: -aŋ
e. それ以外(すなわち a のあと): -ŋ[注5]

同様の交替をしめす形態素には(3)にしめすようなものがある。

(3) a. 場所格の -ya/-wa/-ŋa/-a/-∅: 本稿では代表形を -Xa と表記する。
b. 複数形の -yaʔ/-waʔ/-ŋaʔ/-aʔ/-raʔ: 本稿では代表形を -Raʔ と表記する。
c. 命令をあらわす述部標識の-yáŋ/-wáŋ/-ŋáŋ/-áŋ/-ŋ: 本稿では代表形を -Xáŋ と表記する。
d. 否定命令をあらわす述部標識の -yéʔ/-wéʔ/-ŋéʔ/-éʔ: 本稿では代表形を -Xéʔ と表記する。
e. 場所格後置詞と形態をおなじくし、動作の方向性をあらわす助動詞の -ya/-wa/-ŋa/-a/-∅: 本稿では代表形を -Xa と表記する。

注5 たとえば ama「彼」の目的格形は ámaŋ となる。これは áma と -XAN からなる。しかし実際には連続する a が単音の a として実現している。áma-ŋ と分析するべきなのか、ám-aŋ と分析するべきなのかは決定できないという問題がある。本稿では便宜的に -ŋ とする解釈をとる。その理由については、類例をあつかった #30 ですでにのべた。

f. 目的格後置詞と形態をおなじくし、動作の方向性をあらわす動詞の -yaŋ/-waŋ/-ŋaŋ/-aŋ/-ŋ: 本稿では代表形を -xaŋ と表記する。
g. 動作の方向性や利害関係をあらわす助動詞の -yaiŋ/-waiŋ/-ŋaiŋ/-aiŋ: 本稿では代表形を -xaiŋ と表記する。
h. 「も」をあらわす -yɯʔ/-wɯʔ/-ŋɯʔ/-ɯʔ/-yɯʔ: 本稿では代表形を -Yɯʔ と表記する。
i. 補足疑問文の標識の -yá/-wá/-ŋá/-á: 本稿では代表形を -xá と表記する。

上記以外の形態素で類似した交替をするものは確認されていない。

記号・略号一覧

記号	名称	(チャック語での)語形
-	小辞境界	
=	句内での自立語境界	
1	話し手の人称	ŋa
2	聞き手の人称	naŋ
3	第三者の人称	áma
BU	否定述部標識	-ɓɯʔ
C	子音(consonant)	—
CL	類別詞(classifier)	いろいろ
COM	共同格(comitative)	-íŋ
COND	条件(conditional)	-néʔ～-neʔ
CONJ	接続(conjunct)	-ká
COP	繋辞(copula)	rɪ
DEF	定辞(definite marker)	-gəlú/-kəlú/-gə́lú/-kə́lú
EMPH	強調(emphatic)	いろいろ
FUT	未来(future)	-Gá
GA	名詞節化標識	-Gá
GEN	属格(genitive)	-Gá
GO	継起をあらわす従属節小辞	-GOʔ
HE	動作をあらわす述部標識	-héʔ～-heʔ
HS	伝聞(hearsay)	-láiʔ～-laiʔ
IMP	命令(imperative)	いろいろ
KAAIN	動作の方向をあらわす助動詞	-kə́aiŋ～-kəaiŋ

KALAN	動作の方向をあらわす助動詞	-kə́laŋ～-kəlaŋ
LA	移動をあらわす助動詞のひとつ	-la
LOC	場所格(locative)	-Xa
NA	助動詞のひとつ	-naʔ
NAIN	完了を含意する述部標識	-náiŋ
NEG	否定(negative)	A-
NIMP	否定命令標識(negative imperative)	-Xéʔ
OBJ	目的格(objective)	-Xaŋ
ONOM	擬音語・擬態語(onomatopoeia)	いろいろ
PL	複数(plural)	-Raʔ
PTB	チベット・ビルマ祖語(Proto-Tibeto-Burman)	
Q	疑問文標識	-Xá
TOP	主題化標識(topicalization marker)	-Gɯʔ
V	動詞(verb)	—
WrB	ビルマ文語(Written Burmese)	
XA	動作の方向をあらわす助動詞	-Xa
XAIN	動作の方向をあらわす助動詞	-Xaiŋ

参考文献

【日本語文献】

大野　徹(おおの・とおる). 2000.　『ビルマ(ミャンマー)語辞典』大学書林.

藤原敬介(ふじわら・けいすけ). 2002.　「チャック語の音声に関する考察」、『京都大学言語学研究』第 21 号、217–273.

藤原敬介(ふじわら・けいすけ). 2003.　「マルマ語の音声に関する考察」、『京都大学言語学研究』第 22 号、237–300.

藤原敬介(ふじわら・けいすけ). 2004a.　「チャック語の格標示と方向接辞」、2004 年 4 月 24 日、第 2 回チベット=ビルマ言語学研究会、京都大学ユーラシア文化研究センター.

藤原敬介(ふじわら・けいすけ). 2004b.　「チャック語の動詞述部標識 “heʔ” の意味と用法」、『日本言語学会第 129 会大会　予稿集』、129–134.

藪　司郎(やぶ・しろう). 1993.　「マルマ語」、亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第 5 巻【補遺・言語名索引編】』三省堂、346–348.

【漢語文献】

徐悉艱・肖家成・岳相昆・戴慶厦(編著) 1983. 『景漢辞典』、昆明: 雲南民族出版社.

【その他の言語の文献】

BBS (Bangladesh Bureau of Statistics) (ed.) 2004. *Statistical Pocketbook of Bangladesh 2002*. Statistic Division, Ministry of Planning, Government of the People's Republic of Bangladesh[注6].

GORDON, Raymond G. (ed.) 2005. *Ethnologue: Languages of the World* (*Fifteenth Edition, Internet Version*). SIL International.
http://www.ethnologue.com/web.asp(2005 年 6 月 25 日確認)

MATISOFF, James A. (ed.) 1996. *Languages and Dialects of Tibeto-Burman*, STEDT Monograph Series No. 2. Berkeley: Sino-Tibetan Etymological Dictionary and Thesaurus Project, Center for South and Southeast Asia Studies, University of California.

MATISOFF, James A. 2003. *Handbook of Proto-Tibeto-Burman: System and Philosophy of Sino-Tibetan Reconstruction*. Berkeley: University of California Press.

(附記)

本稿は財団法人松下国際財団・2001 年度松下アジアスカラシップ(研究テーマ:「チャクマ語の記述的研究—共時態から通時態へ—」)による研究成果の一部である。

注6 この資料における人口統計は BBS による *Population Census 1991* にもとづいている。

チャック語の資料と文法解釈
—「虎の夢」—

(Tyakku-go no siryō to bunpō kaisyaku
— 'tora no yume'—)

藤原　敬介
HUZIWARA Keisuke

要旨

チャック語はバングラデシュ人民共和国・チッタゴン丘陵でチャック人によってはなされている言語である。チャック語は系統的にはチベット・ビルマ語派のうちルイ語群に分類される。1991 年の統計によると話者数は 2000 人ほどである。

本稿では筆者が収集したチャック語資料のうち「虎の夢」と題する民話について、本文と文法解釈を提示した。附録としてチャック語の連声規則を記述した。

46 文のみじかい資料のなかにも、チャック語を記述するうえで必要となる、以下のような情報がふくまれている。

- 日本語の「のだ」形に類似した「GA-HE」形(#6、#8、#9、#12、#15、#16、#17、#19、#22、#24、#26、#27、#31、#34、#36、#37、#40、#42、#45)。
- 場所格および目的格後置詞と形態をおなじくする、動作の方向性をあらわす助動詞(#10、#14、#15、#22、#30、#38)。
- 動作の完了性と動作の方向性にかかわる助動詞(#8、#21、#36、#45、#46)。
- 感情をあらわす述部の特殊な形式(#23)。
- 類別詞の語順と、特に「一」がつく場合の形態音韻論的交替形(#1、#2、#3、#4、#5、#8、#13、#32)。
- 子音連続 Cv- の解釈にかかわる語頭音重複形(#33)。

(受理日 2005 年 7 月 1 日)